

■(乞食)桃水雲漢  
とうすいうんけい  
キリスト教禁止・1612＝

曹洞宗の禅僧であったが、ある日出奔し、以後乞食僧として、完全なアウトサイダー生きた途方もない人物。

この頃、筑後国柳川で、名もない商人の子に生まれる。自分の年齢を知らず、当時の人も伝えていないのでたしかな生年は分らない。父母の名も不明だが、浄土宗の熱心な信徒であつたらしい。幼名も不明。

\_\_幼時より仏像に関心を抱いていたことから、商人として育てることを諦めた両親によって、

徳川家康没・1616＝ 4歳：  
吉原遊郭始・1617＝ 5歳： この頃、\*肥前国武雄の円応寺に連れて行かれ、住持の園庵宗鉄に就いて出家。不思議な霊力を持ち、多くの優れた僧を育てていく禅師園庵との出会いが、その後の桃水をつくっていく。

利根川付替始1621＝ 9歳：

徳川家光將軍1623＝11歳：  
イスパニア断交・1624＝12歳： この頃には、学業も進んで、頭の良さが周囲の人たちを驚かすようになり、

やがて、\_\_自ら断食や読誦をしたり、深山に籠ったり、大河の淵で坐禅するなどして、変わった子と見られるも、師園庵は動じないが、本人は、師が弟子を集めて五欲について慈誡を垂れた際、'たいしたことを、さも難しいように教訓される'とつぶやいたというほど、五欲と無縁であった。

寛永禁書令・1630＝18歳：  
糸割符拡大・1631＝19歳： この頃、\_\_諸国遍参(諸方の善智識に参じて心を磨く)の旅に送り出され、  
徳川秀忠没・1632＝20歳：

\_\_黒衣を纏い編み笠をかぶり、錫杖をついて、江戸に赴き、神田台にあった曹洞宗の名刹吉祥寺に至って、その学寮に学び、下谷の寺にいた時には、塔婆が垣根代りに使われているのを見るや、托鉢の際ごとに、新しい塔婆を立てて行ったことから、いつしか垣根には使われなくなったという。

その後、\_\_大愚宗築、雲居希膺、

島原の乱終・1638＝26歳： この年東海寺を創建した\_\_沢庵宗影など、臨済宗の禅匠に歴参、  
鎖国令Ⅴ・・・1639＝27歳：

初の高札・・・1642＝30歳： \_\_師園庵が熊本の流れ院に移ったことを知るや、師の下に帰って研鑽を続け、

・・・・・・・1645＝33歳： 沢庵宗影が死去。

市中諸法度・1648＝36歳： この間、流れ院の本寺である長州の大寧寺の板首を務め、

徳川家光没・1651＝39歳：

新利根川完成1654＝42歳： \_\_中国の禅僧隠元隆琦が渡来したと知ると、長崎に出掛けて見え、深く感化される。

明暦の大火・1657＝45歳： \_\_園庵の室に入って、その法を嗣ぎ、  
人身売買禁止1658＝46歳： \*能登の総持寺に赴いて、仏祖の法を継ぐ儀式を済ませ、導師になるに至った。

まもなく、懇請されて、何度も盗賊の災難があつて無住になっていた大坂の法蔵寺の住持となり、2年の間に、浪人となった一家20人余を1か月あまり宿泊させて奉行所の問題になるも正直さで無事切り抜け、訪ねて来て一時弟子になった慧定(仲の良かった法弟雲歩の弟子)に偈を与え、もっぱら托鉢をするだけでなく、それを他人たちに与えて歩く乞食僧になるなど、語り草になる多くの印象を残して、大坂を去り、僻地たる\_\_肥後南郷の清水寺の住持を3年間、この間、最初の得度の弟子是看ができる。

殉死の禁止・1663＝51歳： 生まれ故郷の築後柳川に姿を現し、しばらく留まって説法してほしいという郷里の人たちの懇請を固辞して、\_\_島原の晴雲寺に短期間住した後、城主高力左近太夫の招請で禅林寺の住持になり、得度の弟子、チン(王偏に深のつくり)洲と智伝ができる。この間、前住職が植えていた牡丹や芍薬を茶に植え替えてしまったり、「大蔵経」を購入すべく、各地をまわっていた鉄眼道光の經典の講座に参加、流れ院の園庵の後を継いだ法兄船岩と同席、休憩中、その寺の菜園に肥桶をかついで施肥していたところを船岩から咎められるも、'誰でも尻をぬぐう手で合掌するのではないが'と満場の笑いを誘ったりするなど、身をもって、教養文化主義の"きれいごと"を排して、

酒井忠清大老1666＝54歳：  
入鉄砲出女令1667＝55歳： \_\_遠近に名を知られた導師として、多くの高僧の協力も得て、冬季大研修会を開いた際、  
足利学校再建1668＝56歳： \*年が明けて、90日にわたる一切の行事が終了、参集した大衆の別れの挨拶の儀式のため、侍者が部屋に入るも姿は見えず、袈裟袋も杖も無く、'行方は知らねど一足先に発つ'の張り紙、高力左近太夫も渡し場など要所を固めさせるも行方知らず、以後、生涯出現しなくなる。まさに蒸発であった。没後85年に面山瑞方の著した「桃水和尚伝賛」により、乞食の群れに身を投じ、草鞋や酢を売って生計をたて、乞食桃水、酢屋道全(すやどうぜん)と称された、風狂、散聖の人として知られることになる。

そこには、嘆き悲しんだ弟子のチン洲と智伝が師を捜す旅に出て数カ月、清水寺近くに乞食が集まっているところに出くわし、そこに師がいるのを発見、戻るように懇願するも拒否されるが、偈を与えられ、一時共に歩いて、行き倒れの癩患者の老乞食に出くわし、そこに残された雑炊を食べることが出来ないのを諭され、結局立ち去られてしまう。すでに出家僧であったが、全ての名利を捨てるべく、そこからも出家、全く紐のつかない布施の行で、ついには阿弥陀仏と対等に交際するに至ったと言い、また、面山和尚が熊本の禅定寺に住していた時、釣玄和尚から聞いた知法尼の'桃水が布施を受け癩患者を救って立ち去った'と言う話が伝えられる。この間、悪逆無道ぶりが知られた領主は仙台に流罪となっている。

談林派俳諧・1675＝63歳：

雲歩禅師が江戸から熊本に帰る途中、摂津の有馬温泉で老いの身を養った時、腰が痛むと湯治に来ていた桃水から声をかけられ、若き日の二人に帰って、20日ほど一緒に湯治するも、忽然と姿を消して、最後の別れになり、その後、京都東山の草庵に戻って暮らすうち、訪ねて来る人がうるさいと、以後も、定着することなかったが、旧友愚白が在所を探り当て、弟子とともに見舞いに上がるも、悠然としていて、かえって見舞われているようだったと言う。やがて、\_\_角倉了以の孫で京都角倉家を確立した7代玄紀が、帰依していた黄檗宗の高泉和尚から乞食桃水の話聞いて、ついに自邸に招くことに成功して拝顔、坐禅についての心構えを聞き、その答え'醤油は土用のうちに造るのが、味噌は寒のうちにつくがよい'に感じ入って傾倒、なんとか定住してもらおうと、工夫を重ね、北山の鷹峰に住む、かつての下男酢屋の茂助の家を紹介、ついに説得して定住、以後、"酢屋の通年""酢屋の道全"と称して、酢を売りながら、平安無事な日々を送るうち、八百屋お七・1683＝71歳： 威儀厳然として端座したまま、偈を遺して、没した。角倉玄紀から報せを聞いた、桃水の旧弟子チン洲と智伝は、仏国寺から駆け付けて遺骸を迎え、高泉和尚のもとと葬儀を行い、境内に無縫塔を建立した。

田中忠雄「乞食桃水～この途方もない人」(曹洞宗宗務庁)、